学界消息

史学研究会関係

史学研究会大会は、恒例により十一月一日（土）二日（日）の両日にわたつて開催した。一日の「京都の襖絵見学」は、折あしく雨天ではあつたが、五十名の会員の参加を得て土居次義氏の懇切精緻な解説のもと予定通り智積院・建仁寺禅居庵・大徳寺本坊・聚光院・黄梅院・大覚寺を巡回し、午後四時散会した。第二日の大会及び総会は京大法経第五教室で開催した。総会は宮崎理事長の挨拶にはじまり。織田理事より、会務・会計の報告が行われ、会計報告は原案通り万場一致で承認をうけた。次に、現評議員の任期は昭和三十四年三月三十一日を以て満了するので、別面会告の通り次期評議員の選出が行われた。大会の講演は、九州大学鏡山猛氏、慶応義塾大学松本信広氏、京大人文科学研究所安部健夫氏の三氏に、次のテーマによる講演を御願いした。大会終了後、楽友会館にてビールパーティーによる懇親会を開催した。

筑前沖の島の祭祀遺跡　鏡山　猛氏
元代知識人の二類型　安部健夫氏
インドシナの土地と人　松本信広氏

藤岡謙二郎理事の帰朝

一昨年末より一ケ年にわたつて在外研究員としてロンドン大学に留学し、更に欧米各地を視察旅行中であつた本会理事藤岡謙二郎氏は、昨年十二月十四日、無事帰朝された。

国史関係

読史会秋季大会

一一月三日（月）
午前九時　於京大文学部第一教室

民間信仰の問題
——山と川と田について——　吉川　正倫
評定衆設置の事情　上横手雅敬
法興寺建立の史的背景
——蘇我氏と仏教——　田村　円澄
中国地方の横穴について　山本　清
ナニワのみそぎ　山根徳太郎
不三得七法について　菊地　康明
恵信尼公の寿塔について　梅原　隆章
法燈国師と高野聖　五来　重
近世村役人の性格　日置弥三郎
明治後期社会主義思想史に於ける非政治主義について
——秋水と尚江——　山岡　桂二
銭座について　小葉田　淳

読史会一二月例会

一二月一三日（土）
午後一時　於京大陳列館演習室

幕末肥前藩の財政構造　芝原　拓自
太宰春台の「経済録」と「産語」について　今中　寛司

真宗史研究会大会

一一月一四日（金）
午後一時　於龍谷大学図書館講堂

北陸一向一揆の階層関係　井上　鋭夫
酒海について　北西　弘
顕証寺蓮淳について　谷下　一夢
親鸞における一向専修の限界　日野　顕正
初期真宗の本尊について　宮崎　円遵
真宗大坊の構造とその変質　森岡　清美
討論司会　笠原　一男

仏教史学会学術大会

一一月一五日（土）
午前九時　於京大楽友会館

個別発表

平安時代の浄土教　名畑　崇
日宋交渉と南都浄土教　岡　玄雄
敦煌変文の素材展開にかんする一考察　金岡　照光
仏乗院日慱の学系について　岡田　栄照
優婆塞貢進解　薗田　香融
新羅浄土教についての二・三の問題　恵谷　隆戒

共同課題「仏教と民衆生活」

京都壬生寺閻魔堂の六斎踊（映画と録音）　竹田　聡洲
敦煌仏教における僧と俗　藤枝　晃
庚申の信仰について　窪　徳忠

討論司会　小笠原宣秀　五来　重

日本史研究会大会

一一月一五日（土）

午後一時　於立命館大学清心館

個別研究発表

足利基氏論　杉山　博
商品生産をめぐる村と商人　岡　光夫
帝国主義復活の問題について　小野　義彦

一一月一六日（日）

午前九時　於立命館大学清心館

大会共同研究報告

統一テーマ「政治史をめぐる諸問題」
——歴史の政治史的把握のために——

奈良末平安初期の政治上の問題
——中央官人の動向をめぐって——　田中正日子
平安後期の社会構造　村井　康彦
明治政権の成立　後藤　靖
明治後期大正初期社会主義思想の一特質
——アナ・ボル論争を中心に——　師岡　佑行

東洋史関係

東洋史談話会大会

十一月三日（月）

午前九時～午後五時

於京大人文科学研究所講堂

蜀漢政権と土着豪族　狩野　直禎
宋代の客戸について　柳田　節子
西晉の封王の制について　越智　重明
宋代林特の茶法改革について　佐伯　富
オマル一世の土地政策　嶋田　襄平
明清時代における佃戸制の位置　重田　徳
所謂東南互保約款について　永井　算巳
同盟会の民生主義　北山　康夫
国共分裂（一九二七年）後の統一戦線問題　松本　善海
居延簡に見えたる名籍　森　鹿三

〔晩餐会〕　午後六時—七時　同研究所ホール

東方学会第八回会員総会

十一月四日（火）

午前十時～午後八時

於京大人文科学研究所講堂

日本の官位令と唐の官品令　宮崎　市定
隋唐に於ける中国的仏教の性格とその形成　結城　令聞

旧制大学院会十一月例会

十一月八日（土）　於陳列館会議室

高麗朝に於ける官職の一端　李　大熙

西洋史関係

第二六回西洋史読書会大会

十一月三日（月）

午前九時半―午後五時半
於京大楽友会館

ここ数年来の傾向として全国の研究者の発表でにぎわった。西洋史読書会が全国学会の性格をおびてきたことは、学会の発展としてよろこびにたえない。内容は次のとおりである。

ヒッタイトの封建制　岸本　通夫
非典型的村落共同体について　鯖田　豊之
ボナヴェンツゥーラとアリストテレス哲学との関係
――十三世紀哲学思想史上の一問題――　坂口　昂吉
中世文化史研究の方法　兼岩　正夫
カルヴィンの思想に於ける反抗権の問題　砂原　教男
十八世紀中頃に於けるイギリスの政治構造と商人層
――毛織物商人ブライス・フィッシャーの場合を中心として――　米田　清治
三つのアメリカ革命史論　今津　晃
アメリカ独立は「革命」か否か
――Robert E. Brown 教授の見解をめぐって――　三浦　進
J・ベンタムにおける自然法の否定　若松　繁信
産業革命と景気循環　合田　祐作
チャーティストとインターナショナリズム　古賀　秀男
人民党の発生について　山岸　義夫
デ・レオン主義とレーニン主義
――米・露左派社会主義理論の比較――　野村　達朗
トランスヴァール危機前後のドイツの対英政策
――イエルサリムスキ批判――　中山　治一

地理学関係

小牧実繁先生還暦記念祝賀会
十一月二日（日）午後五時
高野橋畔　料亭「大和」

本年度めでたく還暦を迎えられた小牧実繁先生を囲んで、地理学談話会の懇親会が催された。集る者六十名、こもごも立つて、祝賀のことばをのべ、懐旧の情を尽くして九時散会した。

人文地理学会大会
十一月三日（月）・四日（火）
京都大学文学部第七・八教室

本年度十周年を迎えた人文地理学会では、右の如く大会を開催した。三日は一般発表四日はシンポジウム「漁業」「圏構造」、引続いて五・六両日〈若狭〉〈名古屋〉方面へエクスカーションを行つた。なお本会員の研究発表は左の通りである。

〔一般発表〕
琵琶湖西岸の農業集落構造　藤本　利治
海南漆器の伝統性　大島　襄治
干拓と漁民
――児島湾の場合――　由比浜省吾
名古屋の商業地理　樋口　節夫
チベットのE気候に関する疑問　浅井　辰郎
近仏国の位置について　木村　宏
山科・醍醐における平安末期寺領田畠の景観形態とその性格　山田　安彦
藩政村の村領の広さとその集落構成　近藤　忠

〔シンポジウム〕
〈漁業〉
沿岸漁業の停滞性と組合自営漁業　藪内　芳彦

瀬戸内海漁業の「停滞性」について　河野　通博

〈圏構造〉

圏および圏構造論の動向　浮田　典良

圏構造と地域類型　山澄　元

工業分布における圏構造　春日　茂男

圏構造概念の検討　小林　博

圏構造論の相互関係　水津　一朗

人文地理学会第28回例会

十二月七日（日）

午後一時　名古屋大学文学部　会議室

課題「耕地の集中と分散」

問題提起　松井　武敏

事例研究Ⅰ　浮田　典良

事例研究Ⅱ　野原　敏雄

事例研究Ⅲ　喜多村俊夫

懇親会

発表終了後、大津橋畔「大津寿司」に於て会員約三十名の出席を得て行われた。

考古学関係

日本考古学協会第二十二回総会

一〇月二六日（日）七尾市文化センター

新潟県中魚沼郡津南町神山遺跡　麻生　優

宝達山周辺に於ける縄文式土器の分布状態について　秋田　喜一

奈良県大川遺跡の調査　酒詰　仲男　岡田　茂弘

京都府宮ノ下遺跡　酒詰仲男・堅田　直・岡田茂弘

長者ヶ原の調査　藤田　亮策

石川県石川郡御経塚遺跡の調査　高堀　勝喜

奥羽地方北部発見の縄文文化晩期の甕棺——青森三戸郡名川町大字平小字前の沢出土——　江坂　輝弥

芦屋市会下山弥生式住居址調査報告——表六甲山高地性遺跡の一例として——　村川　行弘

四本の銅鉾を出した竪穴住居址——肥後直木町轟遺跡——　田辺　哲夫

種子島広田遺跡第二次調査　国分　直一

免田式土器に伴う墳墓と推定される遺構について　乙益　重隆

広島県大久保遺跡の竪穴住居址　豊　元国

静岡県三池平古墳の調査について　大塚　初重

地下式古墳の年代について　石川恒太郎

加賀国丸山横穴群第二次調査　上野　与一

若狭大島半島調査概要——古墳と師楽式の遺跡——　石部　正志

山陰地方古墳出土の土器について　山本　清

静岡県浜北町内野神明社上古墳　下津谷達男

大宅寺調査概要　有光教一・坪井清足　金関　恕・小野山節

越後に於ける一中世墓について　中川　成夫

江南の漆器文化　市川健二郎

鉄器と鉄滓と推定原鉱の化学分析　和島　誠一

会　告

一、「史林」の増頁と会費増額について

すでに前号同封の会告にて御知らせしましたように、評議員会ならびに理事会の決定によりまして本号より「史林」の建頁および会

費を、次の通り増額いたします。なおこの件につきましては去る十一月二日開催の会員総会に御報告し、万場一致で承認をうけましたが、当日御出席なき会員各位におかれましても、御了承、御協力下さいますよう御願いいたします。

新建頁　年間九〇〇頁　一号当約一五〇頁
旧建頁　年間六〇〇頁　一号当　八八頁（六号のみ一六〇頁）

新会費　年額九〇〇円　一号定価一八〇円
旧会費　年額六〇〇円　一号定価一〇〇円（六号のみ約二〇〇円）

（御注意）毎号奥附の定価は一八〇円でありますが、会員各位の会費は、一号当り一五〇円として計算し、毎号「お知らせ」を同封して残高を御連絡申しあげます。

一、次期評議員の選出について

会則により、現評議員の任期は、来る三月三十一日を以て満了いたします（任期は二年）。次期評議員の選出には、会員中より理事会において選出し会員総会の承認を経ることを要します。従いまして、去る昭和三十三年十月二日開催の理事会におきまして、慎重審議の結果、現評議員のうち、辞意を申し出られた石田龍次郎氏を除く五九名の方には全員留任を御願いすることとし、新たに岸俊男氏（京都大学助教授）中山治一氏（大阪市立大学教授）樋口隆康氏（京都大学助教授）を追加選出することに決し、十一月二日開催の会員総会に提案しましたところ、万場一致を以て承認をうけました。次期評議員全員の御氏名は現評議員各位の任期満了の後、当史林誌上に公告いたしますが、とりあえず選出の経過につきまして御知らせいたします。

史学研究会

会員各位

編集後記

一九五九年の新春、あけましておめでとうございます。会員の各位も、それぞれ新しい御抱負をおもちになつておられることとぞんじますが、この史林も永年にわたつたページ数の不足を、なんとかここに解決して、ことあらたまつた浄机の上におとどけできる運びとなりました。肉体にはその優美があり、精神にはその才智があるように、史林もその活気ある内容を誇らなければなりません。朝尾氏をはじめとする多彩な論稿はこの要求にはつきり解答をあたえるものと自負しております。前巻では8ポで組まざるをえなかつた論文も、今後できうるかぎり9ポで組めるようになりました。いくぶん紙面の余裕もゆるされることになりましたので、会員各位の御投稿をお待ちしております。また本巻より書評と紹介の二つの欄に分けることにいたしました。紹介欄についても、今までの書評に御投稿たまわつたのと同じく、会員各位で適当な著書、論文を御紹介いただきとうございますし、またそれについての資料や御意見をお送りいただきとうございます。

これから会員各位の御精励をおいのりして。そして凡庸でない四二巻を築いていくことを心にきめながら。

（永井三明）

一九五八年十二月二五日印刷
一九五九年一月一日発行
定価一八〇円
史林（第四二巻第一号）
京都市左京区吉田本町
京都大学文学部内
発行所　史学研究会
理事長　宮崎市定
編集主任　赤松俊秀
振替京都五一五五番
印刷所　京都市下京区西七条御所ノ内東町三九
中村印刷株式会社